

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 41

1992年4月20日

## 第41号 目 次

1. 会員活動報告
2. 書 評
3. 学術・文化情報
4. 近着会員業績
5. 事務局から
- 海外ラテンアメリカ研究センター  
紹介 (13)

### 1. 会員活動報告

#### ○西日本部会研究会

西日本部会は、92年1月18日(土)に南山大学において、同大学ラテンアメリカ研究センターとの共催で行われ、染田秀藤会員が、「ワマン・ポマとラス・カサス」と題して、フェリッペ・ワマン・ポマ・デ・アジャラの残した膨大な著書である *Nueva Crónica y Buen Gobierno* について報告した。同書は、1908年にデンマークの王立図書館で発見されたものだが、荒唐無稽の事柄もかなり含まれているため、長らく史料的な価値に乏しいとされてきた。ところが、近年ポマが独学でスペイン語をマスターしたインディオであり、ラス・カサスの影響を受けつつインディオの立場から征服を批判的に記述した先駆者であったとする評価が現れ、染田会員もこうした視点から同書の重要性を強調した。発表のあと、活発な質疑応答が行われた。出席者は学外者を含め約20名。(文責 松下 洋)

#### ○ラスアメリカス研究会

1月11日、ブラジルの経済学者ドスサントス氏を迎え、同志社大学において第3回ラスアメリカス研究会が行なわれた。前半は、南野泰義氏(立命館大学院生)により、「V.バンビーラ『従属理論：反批判』を読む」と題して発表があり、次にこれを受けてドスサントス氏から、近年の世界情勢に関して従属理論の立場からのコメントがあった。

南野氏の発表は、バンビーラの「従属理論：反批判」(Teoría de la Dependencia: una anticrítica)をもとに、従属理論の歴史的形成の概略と世界資本主義システムの中で、中心諸国の生産過程において生じた変化を理解することをつうじてラテンアメリカの資本主義的生産様式と国内市場形成の特殊性を理解しようという従属理論の問題提起が紹介された。さらに、アウグスチン・クエバとエンリケ・セーモによる従属理論批判をとりあげ、それらの従属理論批判にたいするバンビーラの反批判が紹介された。その中で、これらの従属理論批判がラテンアメリカにおける資本主義分析の新しい方向を示せなかったという問題点を指摘するとともに、従属という現象が国際的な関係に止まらず、征服によって条件付けられた性格とダイナミズムをもつ、当該国の社会・経済的構造を規定する内的関係として提起した従属理論の優位性を明らかにする一方、従属理論の今後の課題が検討された。

ドスサントス氏のコメントは、前の発表を踏まえながら、1970年代から湾岸戦争など世界情勢に関して行なわれ、ソ連の崩壊に話がおよんだ。1968年はメキシコを含め欧米諸国や日本の世界各国で大学紛争の嵐が吹き荒れ、北米のベトナム戦争撤退など世界的に時代の転換点となった。1973年の石油危機は、OPECの石油戦略に見られるように第三世界に機軸を傾斜させる方向をもたらしたかに見えるが、あくまでも先進工業諸国の需要に規定されている点でOPECの自律的経済が確立されたわけではない。メキシコ、ベネズエラなどのラテンアメリカの産油国の石油戦略が成功していない例を見ても明らかであり、80年代、ラテンアメリカは債務危機に陥った。またアジアのNIESについても従属資本主義としての限界から永続可能か疑問である。湾岸戦争は経済的不統合に対する先進工業諸国の対応を示したものである。さらにソ連の崩壊によって、世界の機軸は「民主主義」に傾くだろう。この結果、全体としてウォラスタインの言う世界資本主義に基づく統合が進むことになるだろう。(文責 松久 玲子)

## 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (13)

### スミソニアン熱帯研究所 (在パナマ) Smithsonian Tropical Research Institute (STRI)

スミソニアンといえはかの博物学の殿堂、ワシントンD. C. の博物館が有名だが、その傘下にあつて米国外に存在する唯一の研究施設がSTRIである。熱帯学専門研究所のため、厳密に言うと本欄の趣旨からはずれるが、昨今話題の熱帯林保護問題とは切っても切れない間柄にあり、また筆者はパナマ滞在中しばしばお世話になった関係上、会員諸氏に御紹介しておきたい。

STRIはパナマ国内数カ所に研究施設を擁するが、旧運河地帯に置かれた本部とガツン湖に浮かぶバロ・コロラド島(BCI)が二本柱である。運河建設に伴い周囲が水没して生まれたBCIは、昆虫学者らの発案で1923年に全体が研究専用保護地区に指定された。運河と生態系の関係に早くから注目していたスミソニアン協会は、46年正式にBCIを管轄下に入れ、STRI発足と相成る。現在はできる限り原生林を保護(STRIの保護林は約5400ヘクタール)しつつ、研究者が何カ月も泊まり込んで観察・実験に専念できる態勢にある。環境教育に力を入れるSTRIは、研究の妨げにならない範囲でBCIを公開しており、予め申込みさえしておけば一般人でも規定の見学日に島を訪ねられる。近年注目を浴びた環境保護プロジェクトには、農民の生活向上にも配慮したグリーン・イグアナ養殖計画があった。

パナマ市内の本部は事務局、図書館そして会議場から成る。図書館の蔵書はもちろん生物・生態学中心だが、隣接分野である文化人類学、地理学関連の文献や、何より参考図書類が揃っている点、パナマ暮らしの身には非常にありがたかった。ワシントンD. C. 直結のコンピュータを使ってスミソニアン協会全体の蔵書検索も可能。ブラジル・アマゾンに関する資料はSTRIに相当集まっているそうなので、熱帯林問題に関心のある方には一見の価値があろう。

日本からも自然科学研究者の来訪は多く、筆者は客員研究員としてみえていた井上民

二・京大農学部教授の知遇を得た。井上氏はハリナシバチの研究が御専門だが、氏から伺ったユカタン・マヤ村落の養蜂業のお話は興味深く、久しく理科と縁のない人間にも大いに刺激となった。本学会には理系の会員が少なくないにもかかわらず、ふだんあまり人文・社会系の会員と交流がないのは残念である。

90年8月、STRI本部で開かれた「征服による環カリブ社会の変容」シンポジウムは、その種の交流の好例といえる。米パ両国のほか中米、コロンビア、ベネズエラ、カナダ、英国などから40名以上の報告者が集い、動植物誌や農耕形態、病理学、人口動態といった極めて理系の話題から言語分析、首長制社会、エスニシティ、インディオ居住区画定の法的側面……等々なじみのある報告まで、多岐に渡る議論を開陳した。小さいながらも視聴覚設備や同時通訳用のブースまで備えたホールにいと、ここがパナマであることを忘れそうになる。

実際、STRI本部から2キロと離れていないパナマ国立文書館に行くと、ろくに空調設備のない部屋で雨ざらし同然の資料と向き合う現実がある。両者の格差はあまりに大きく、STRIの快適さは、実はついこの間まで運河と運河地帯を支配してきた米国の快適さそのものなのだという感慨が湧いてくる。STRI発展史を丹念にみてゆけば、おそらくそこにも米パ関係の生々しい断面が浮かび上がってくることだろう。

所長はIra Rubinoff、独自の出版物やSTRIグッズも販売。

連絡先: Georgina de Alba (Coordinadora de Educación)  
STRI, Apartado 2072,  
Balboa, Rep. de Panamá  
Tel. (507) 62-3133  
Fax. (507) 62-4167, 6084

(東京大学大学院 飯島みどり)

2. 書評 里見 実『ラテンアメリカの新しい伝統 —  
〈場の文化〉のために』晶文社、1990年、  
333ページ。

評者：牛田 千鶴（南山学園）

近代の文化的諸制度は、文化の創造者と享受者を分断し、一方的な伝達と受容の関係を固定化するものであった。これに対し、人々の相互主体的な、対話による創造の営みとしての文化を追求してきたのが、ラテンアメリカの民衆文化運動である。本書の前半で紹介される、「意識化」をめざすパウロ・フレイレの識字運動、事件の隠された真実を暴き出す「新聞劇」、口承文化の伝統が生きる民衆本コルデル、アジェンデ政権下の「新しい歌」運動や人民工房は、まさに民衆自身が文化創造の主体となり、文化の生産システムそのものを変革しようとする試みであった。

著者の関心はとりわけ、アウグスト・ポアールを中心とする民衆演劇運動に注がれる。ポアールは「演劇の生産手段」を民衆に手渡すことの重要性を強調し、観衆自身も芝居に参加する討論劇、同時進行劇とよばれる方法を確立した。民衆演劇では俳優、演出家、劇作家が平等な責任主体としてテキストを構成し、上演の際には観衆も共同制作者となり劇が修正されていく。対話と相互教育の場としての演劇、演ずる側も演ずることによって学ぶという理念が基本にある。著者はここに、ブレヒトの教育劇の決定的な影響をみる。

ラテンアメリカにおけるブレヒト受容の軌跡をたどる第三章では、コロンビアのラ・カンデラリア劇場の集団製作の試み、演劇制度を徹底的に攻撃したブラジルのオフィシーナ、アリーナ両劇団の活動の様子が、写真資料とともに臨場感をもって伝わってくる。なかでも興味深いのは、後二者が苦しい試行錯誤を重ねていく過程である。自己解体に近い状態から生活共同体として再編されたオフィシーナは、地方巡業の旅に出、ブラジル辺境の下層民衆と出会う。そして地域の現実取材した芝居を、街路や広場など劇場以外の場で上演するようになる。官憲の圧力に抗しつつ、より広範な観衆との対話を追求したのだが、「現実をまなぶ旅」の総括をめぐって劇団内部の対立が深化、重要メンバーらの離脱をもって分裂してしまう。

アリーナもまた、美術館、工場、学校など、観衆を見出し得る場所ならばどこへでもでか

けてゆき、「人民大衆の演劇的代弁者」たらんとした。が、その影響力は広がらず、劇団は限界におち当たる。失望して劇団を去ったフィーリョらは、きわめて啓蒙主義的な「民衆文化センター」を設立した。一方ポアールら残留組は、キューバ革命の衝撃による民衆運動の高揚を機に、フレイレの識字運動やフランシスコ・ジュリアンの「農民同盟」と連携した独自の活動を開始した。ポアールは、芝居の技法をも大きく変革した。物語の解説者兼批評家、かつ観衆の代弁者でもある「ジョーカー」を舞台に登場させたのである。観衆が「ジョーカー」を通して演劇に参加・介入するという、独特の新しい対話形式が生まれた。

文化創造への主体的参加という課題は、終章に至って日本の問題としてつきつけられる。日本における深刻な主体の危機は、同時に民主主義の危機でもある。「戦後史における社会の深部、人びとの感受性の深みのところで民主主義を根づかせ、息づかせる運動の決定的な不足、あるいは失敗、敗北が、現在の企業、学校、家庭における管理と抑圧の圧倒的浸透を可能にしまった」という指摘の通りである。主体的成員による民主主義の構築は、日々の生活の様々な場面で追求されていかねばならない。主体的・利己的・非協調的にとられがちな日本の社会で、その試みは闘いを意味する。何よりもまず、無意識のうちに抑圧を内在化させてしまっている自己との闘いなのである。

主体の再生にむけて、著者は「演劇ワークショップ運動」を提起する。文字文化にどっぷりと浸り、既成の文化を消費することにあまりに慣れすぎた社会で、その実現は決して容易ではなかろう。日本に民衆演劇を追求する劇団が存在するのかどうかとも定かでない今日においては、著者がいかなる方法で参加を促し、運動としてどう広がりをもたせてゆくつもりなのかかわりにくい。ラテンアメリカの諸劇団の例にしても、劇団側の意図は明快だが、実際にどれほど、どのような形で観衆が参加し、芝居を変えていったのか、具体的なイメージに乏しい。ともあれ、日本の「無世界状態」に一石を投じた意義は大きいといえる。

書評 堀坂浩太郎ほか編著『ラテンアメリカとの共存  
— 新しい国際環境のなかで』同文館出版、  
1991年、290ページ。

評者：小里 仁（朝日新聞社）

A：「変わりゆく日本とラテンアメリカの関係を、日本、アメリカ、ラテンアメリカ各国の専門家が一堂に会してさまざまな角度から論じた最初のもの」と『はじめに』の中で編者が位置付けている。読んだ印象は？

B：たいへん手堅いというのか、要領よくまとめられていて全体的な状況を理解するのに便利だ。でも、どんな読者を想定しているのかな、と読みながら思った。新聞記者として3年半ほど、ラテンアメリカをせかせかと走り回っていた立場からいうと、なにか望遠鏡で対岸を覗きながら書いている教科書風総論の集まりという気がしたんだ。

A：君の方が逆に大局が見えていないということだってあるだろう。

B：それは、そうだ。読んでいて、参考になったことは多い。第6章「産業補完的な関係の変質」でいえば、ブラジルの大豆生産をめぐる日米の綱引きの記述はその一つだ。まだブラジルが潜在的な大豆生産大国に過ぎなかった70年代初めに、ニクソン米大統領が国際大豆市場での独占的な地位を維持しようとして日本に対して政治的圧力をかけたことは興味深い。一方で、章の終わりに、「日米が緊張関係にあるために、日本はアメリカへの挑戦と受けとられるような新たな指導力をブラジルではとる態勢にない。最近の例として、日本の資金を使ってブラジルが建設しようとしたアマゾン横断道路が、アメリカに拒否されたケースをあげられる」とブラジル人の筆者は指摘しているが、大豆の問題と関連づけていない。一般に、アマゾン横断道路問題は、環境破壊の側面から論じられることが多いが、実は米国の本音は道路の完成によってブラジル産大豆の対日輸出が増加することを阻止したいからだ、と日本の外交当局はみている。この辺りを通り越したら内容が深まったと思う。

A：具体的な事例を中心に組み立てたほうが読者には理解しやすいということかな。

B：第2章「戦後のわが国の外交的対応」で松下洋先生は、75年以降、フォークランド（マルビナス）紛争、中米紛争でのコンタド

ーラ・グループ支持、パナマのソリス政権承認を例に挙げて、ラテンアメリカでアメリカと一線を画す自立的な政策が増えてきたとし、国力を高めたことで「それなりのしたたかさを身につけつつあることの証左といえるかもしれない」と述べた。しかし、同時に「あくまでも対米協調の枠組みを大きく逸脱するものではない」とクギを刺しており、どちらに力点が置かれているのか、よく分からない。アメリカのパナマ侵攻後のエンダラ政権の承認などからして、むしろ、依然として、この地域では日本外交は不在であるとの印象をわたしは受けた。コンタドーラ・グループ支持にしても、事実上リップ・サービスに過ぎなかった。現地取材に応じた日本大使らは、対米追随一辺倒の霞ヶ関の姿勢に無力感を覚えていたし、ラテンアメリカの外交官で日本外交の独自性を認めた人物に、わたしはお目にかかったことはなかった。

A：外務省の『近況』を多用しているが、もっと外交政策の決定過程に立ち入って言及していれば結論に説得力がでてくると思う。かつて安保理の非常任理事国になりそこなった苦い経験から、日本はラテンアメリカ33カ国を大票田とみて大事にしようとしている。この要因も日本外交を考える視点として欠かせないが、触れられていない。

B：ないものねだりかもしれないが、テーマが経済関係に集中して、市民レベルの「共存」の問題はまったく無視されている。日本製品がラテンアメリカで氾濫しているのに、日本についてはほとんど知られていない。日米摩擦のことを引き合いに出すまでもなく、情報ギャップは大きな問題ではないか。

A：終章「新国際秩序のシナリオと関係変革」で、ピーター・スミス氏が90年以降の世界のシナリオを3つ描いている。そこで、全世界的発展という最も望ましいシナリオが成立する前提として、地球規模の経済的相互依存関係と並んで、マスコミの存在をあげ「これによって世界中の人々はお互いに親近感をもつようになる」と期待を表明している。考えさせられるね。

書評 寿里順平『中米＝干渉と分断の軌跡』東洋書店、  
1991年、410ページ。

評者：山岡加奈子（アジア経済研究所）

本書は、ラテンアメリカの中でもあまり光の当たることがなかった中米地域に焦点を絞った、日本人研究者による初めての総合的専門書である。中米に関する著書の出版は、これまで日本では非常に限られてきた。しかもそれらは、中米の中の一国を対象を絞っていたり、あるいは最近の動向を分析するものであったりして、また分野も主として経済か政治に限られていたので、「中米地域」について総合的な理解を得られるものではなかった。著者は、中米での豊富な滞在経験を生かして、中米についてほとんど知らない読者にも理解できるように、地域の地理、歴史から、人種のつばである社会、また今注目の環境問題や援助政策まで総合的に書いている。

著者はまず、最近まで続いてきた中米紛争の分析に読者の関心をひきつけながら、中米紛争は最近始まったものではなく、中米諸国の成立以来の歴史的・社会的背景から生じた数々の問題点が解決されないまま現在に至っているところが原因であるとの立場をとる。そして中米の地理的特徴を旅行記風に説明した後、中米諸国の植民地時代から現代までの歴史を詳しく書いている。この歴史の部分は本書の中心をなしているといえようが、とくに通史的記述を避け、中米でよく知られた歴史上の人物たちの描写に焦点を当てているところは大変興味深い手法であると思う。

タイトルから推察されるように、中米問題を解く2本の柱は、著者によれば、(1)スペインおよび米国の覇権のもとにあって絶えず『干渉』を受けてきたことと、(2)熱帯雨林、山脈や大小の河川がこの地域を『分断』しているために発展が阻害されてきたことである。たとえば、よく聞かれる「なぜ中米諸国はあのように狭い地峡に何カ国も存在していて、統一されないのだろうか」という疑問は、この『分断』の柱によって説明されている。著者は中米の地形の複雑さから、統一の核となる求心的大都市が形成されなかったことを指

摘している。

もう一つの『干渉』の柱では、植民地時代のスペイン統治のありさまから、自国の「裏庭」として、その権益を追求してきた米国の姿が描かれている。とくに米国との関係では、米国の覇権の観点から分析している。しかし他方では、中米に根強く残る他者依存の体質を指摘し、中米側にも問題があることを示している。この他力本願の姿勢を、著者は独立当初からの歴史的要因に求める。度重なる干渉とそれが生んだ依存の悪循環が中米の発展を阻んできたという指摘は興味深い。

著者自身が前書きで予め断っているように、本書では著者が自分で見聞きした事柄を書くという姿勢が一貫しており、従ってその主張はどちらかという主観的に読める。この姿勢には一長一短があろう。第三者を經由した情報をそのまま受け取るのではなく、自分自身で物事を判断する態度には心から敬意を表したいが、他方、分析の根拠として使える情報が限られてくる。著者の立場が一方的になっていないのはさすがであるが、どうしても分析が一般的になりがちである。また、著者の豊富な知識と経験が随所に盛り込まれているために、かえって初学者には全体の構成が分かりにくい。たとえば『干渉』と『分断』という2つの軸を、もう少し前面に出して論じていれば、もっとわかりやすくなっただろう。これは中米関係の基本書が少ないために、1冊で何冊分かの役割を果たそうと著者が腐心された結果であろうかと思うけれども。

本書の特徴として、本文および巻末に添えられた豊富な図表が挙げられる。日本の読者にはなじみのない用語や事件についても、本文の欄外に説明が加えられているので、本文の流れを妨げずに参照できるようになっている。また巻末に年表がついている。これにはコロンブス以前から1990年までの中米各国を1つの年表にまとめてあり、詳細でわかりやすく、すぐれた資料となっている。

書評 松下 洋編『国際政治』第98号 特集「ラテン  
アメリカ—1980年代の国際関係と政治」  
日本国際政治学会、1991年10月、156 +  
xiii ページ。

評者：出岡 直也（東北大学）

本号に収められた論文のテーマは多岐にわたっている。それぞれがすぐれた考察を展開し、各テーマについての必須文献になることは疑いない。同時に、編者も述べているように、多くの論文が1980年代以降のラテンアメリカの政治変動に関連する論点を提出している。ここでは、最近のラ米政治の中心テーマであった「民主化」、特に「民主主義の定着」の問題にひきつけて評者の感想を述べたい。但し、上記テーマにも関連するが国際関係に渡る論文は、紙幅と評者の力不足から論評できない。以下が一部の論文のみを取り上げ、それについてもバランスのとれた書評とは程遠いことを御容赦願いたい。

直接に上記のテーマに関連するのは、民政移管後のペルーとエルサルバドルを扱った遅野井論文、田中論文と、パナマの民主化を担うべき同国の政党政治を分析した飯島論文である。「民主化」の傾向と結び付いて、ラ米政治研究にも大きな変化が生じたが、それは本特集、特にこれらの論文でも十分にみてとれる。権威主義体制が支配的であった時期の、従属論に強く影響された社会経済構造重視型アプローチが力を失い、純政治的要因が分析の前面に出てきた。同様に、外的要因よりも各国の内政が重視される。そこでエルサルバドル、パナマ等、ラ米内でも外的要因の重要性が顕著と思われる諸国を扱った論文でも、明示的な宣言とともに、国内政治勢力（特に政党）のあり方や政策をめぐるダイナミズムが分析の中心になっている。構造的な規定要因の軽視、政治勢力の選択やかけひきの強調は、理論への懐疑と結び付く。編者も指摘するように、各事例の実証に重きを置くのは本論文集の特徴である。

こうした最近の研究動向は喜ばしい変化であろう。しかし、「政治の自律性」を前提として、各国国内の政治的要因を重視することは、構造的な文脈や外的要因の重要性を必ずしも否定しないはずである。本論文集の諸論文は、まさにそれらの制約下にある政治的選択肢の限定・困難を明らかにしている点ですぐれていると考えられる。遅野井論文、田中論文は制約の中のポピュリズム（政策）の困難

・限界を扱い、飯島論文は、政党政治への注目によって逆に、直接的な介入等より深層に棲む、パナマ政治そのものに内部化された米  
国という要因の重要性を示している。

一方、個別の実証的研究や事例間の相違の認識が重要であると同時に、民主化がラ米（さらには世界）全体の潮流であることは、その理論化を促しているし、理論化に不可欠な比較を容易にしている。そのような関心からは、これらの論文にないものねだりをしたくなる。例えば、それぞれの国の社会経済的变化とそれに伴う政治参加の拡大の文脈の中に、諸政治勢力の立場や指向性、各勢力が提出する戦略の限界や制約要因がより体系的に位置付けられると、比較・一般化のために便利であろう。関連して、いくつかの論文で重要な位置を占めている「ポピュリズム」の概念は、比較や、文民政体維持の条件の考察のためには、より一層の明確化が望まれよう（前掲諸論文の対象においては、ポピュリズム的な連合、経済政策、スタイル等の要素間の、また、過去と現在とのずれが大きくないため、分析の妨げになっていないが）。

各国の政治過程を考察する際、民主化の時代になっても、軍という政治主体の分析が不可欠なことは明らかである。大串論文は、南米軍部の政治的指向の側面を決定するドクトリンの形成と内容を吟味する。そこでは、体系的に整理された厳密な議論と検証で、国家安全保障ドクトリンと「排他的」政策指向とを結び付ける類の通説に対する重要なリヴィジョンが提出されている。このリヴィジョンとも関連して、大串氏も指摘するように、ここで明らかにされたドクトリンからは軍が政治の前面に出るか否かは導かれない。ただ、一定段階以上参加が拡大した後の政治社会において、ドクトリンを持つ軍が排他的な政治性を帯びやすいこと、更に進んで、まさに動員の結果たる危機が生じた場合、軍が排他的な方向での政治行動を起こしやすいことは確かだろう。軍が基本的に同じ指向を持ったまま民主主義は定着するか——ラ米政治の課題であるとともに、研究者の課題でもある。

## 1. 会員活動報告(続)

### ○『歴史評論』特集号の刊行

歴史科学協議会編『歴史評論』第501号(1992年1月)が、「『大西洋世界』からの問いかけ——『新大陸発見500年』によせて」と題した特集を組んだ。内容は以下の通り。

「発見と征服」のイデオロギー 染田秀藤  
ジルベルト・フレイレの「ポルトガル文明圏」構想 鈴木 茂  
ハイチ民衆史 1791-1991 青木芳夫  
アフリカ系アメリカ人はアフリカ人なのか、  
アメリカ人なのか ジェフ・レッサー  
中米研究の動向をめぐって 田中 高

鈴木茂会員が本特集の編集を担当した。

## 3. 学術・文化情報

### i) Conferencia "José Martí, Hombre Universal" 開催

キューバ革命党結党百周年を記念して、キューバのCentro de Estudios Martianosが1992年4月7日～10日にハバナ国際会議場で開催した。マルティの思想、文学、宗教観、女性観、自然観その他が討議された。

### ii) L A S A 定期大会 (XVII Congress) 開催のお知らせ

1992年9月24日～26日にロサンゼルス Stouffer Concorse Hotel を会場として行なわれる予定。

問合せ先は William Pitt Union, 9th Floor, University of Pittsburgh  
Pittsburgh, PA 15260 U. S. A.  
Tel. (412) 648-7929

### iii) III Encuentro Continental de la Campaña "500 Años de Resistencia Indígena, Negra y Popular" 開催のお知らせ

1992年10月7日～12日にニカラグアで開催される予定。スペインを中心とする公式の五百周年祝賀式典に反対する、先住民組織、民衆運動体、人権擁護団体の側の最大行事。

### iv) Encuentros en Cadenas 開催のお知らせ

Asociación Latinoamericana de Estudios Asiáticos (ALADA) の総会が1992年11月、アカプルコで開かれる。会期は約2週間の予定。問合せ先は Centro de Estudios

de Asia y Africa (CEAA), Colegio de México.

## 4. 近着会員業績

〔抜〕青木芳夫(共編)「ケチュア語/スペイン語/日本語小辞典」(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第17号、1991年8月)

〔抜〕同上「ハイチ民衆史1791-1991」(『歴史評論』第501号、1992年1月)

〔抜〕同上(共訳)「ジョン・V・ムラ著/アンデス高地社会とその経済」(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第18号、1992年1月)

〔抜〕江口信清「観光立国キューバの苦悩」(国立民族博物館監修『民族学』第58号、1991年10月)

〔抜〕同上「社会主義か死か—キューバ社会主義と観光—」(『立命館史学』第12号、1991年11月)

〔抜〕田所清克「ブラジル北東部文学の諸相: ジョルジュ・アマド考」(ブラジル文学研究資料館『Studia Brasiliana』創刊号、1991年7月)

〔抜〕同上「アマゾニアへの夢想の旅」(同上)

〔抜〕沼沢誠「モノカルチュア経済の生産関係—世紀末葉以降におけるその商品経済の編成の限界・ブラジル、アルゼンチンの事例—」(『山形大学紀要』(社会科学)第15巻第1号、1984年7月)

〔抜〕同上「鉱産モノカルチュア経済の構造—世紀末葉以後第一次世界大戦に至るその編成上の特性・メキシコ、チリ、ペルーの事例—」(『同上』第17巻第1号、1986年7月)

〔抜〕同上「相対的安定期におけるモノカルチュア経済の限界—ラテンアメリカ諸国にみるその形態的側面—」(『同上』第19巻第1号、1988年7月)

〔抜〕同上「相対的安定期におけるモノカルチュア経済の限界—ラテンアメリカ諸国にみるその実体的側面」(上)(下)(『同上』第21巻第1号、1990年7月および第22巻第1

1992年度第13回定期大会のお知らせ

1. 期 日 1992年6月6日(土)、7日(日)
2. 会 場 大阪外国語大学  
大会準備委員会  
大阪外国語大学イスパニア学科  
吉田秀太郎研究室  
〒562 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1  
☎ 0272-28-3111

号、1991年7月)

〔抜〕角川雅樹「イギリス領アンティル諸島」  
(東海大学留学センター『人間の場から』第24号、1991年9月)

〔抜〕同上 「『甘え』とパントマイム—  
スペイン語を通じてみた『同一化』について—」  
(日本精神衛生学会『こころの健康』第6巻第2号、1991年11月)

〔抜〕同上 「バルバドス」(東海大学留  
学センター『人間の場から』第25号、1991年  
12月)

〔誌〕谷洋之「農業部門の二重構造と経済発  
展—メキシコの事例—」(上智大学イベロア  
メリカ研究所『ラテンアメリカ研究』第12号、  
1991年11月)

〔誌〕子安昭子「中米危機と米国の援助政策  
—低強度紛争戦略下の援助に関する一考察—」  
(上智大学イベロアメリカ研究所『ラテンア  
メリカ研究』第13号、1992年2月)

## 5. 事務局から

### i) 寄贈図書

〔誌〕『イベロアメリカ研究』第XII巻第2号  
(上智大学イベロアメリカ研究所、1992年1  
月)

### ii) 会員住所の変更

## 訃 報

中川忠会員は1991年12月14日に逝去さ  
れました。謹んで御冥福をお祈り致しま  
す。

## 編集後記

今号は編集担当者が不慣れなため、書評執  
筆陣にはふだんと比べるとだいぶ早い締切で  
お願いする一方、その他の原稿は最後になっ  
て慌てて依頼する、といった不手際がありま  
した。そのため、ところにより原稿整理の行  
き届かない部分が出ています。読者諸氏にお  
詫び致します。しかしお蔭さまで寄稿者の若  
返り化は果たせたかと思えます。御感想をお  
寄せ下さい。(飯島みどり)

No.41 1992年4月20日発行  
▽305 茨城県つくば市天王台1-1-1  
筑波大学社会学系細野昭雄研究室内  
日本ラテンアメリカ学会事務局  
☎0298-53-5067